

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第14号
2022年 2月20日
編集・文責 吉成正士

第4回学年全体人権学習(2月14日)

1・2学期に続き、2月14日に1年生全体での人権学習に取り組みました。SDGs、防災と続いた今回のテーマは、「日本の人権獲得の歴史中世」です。中世、日本の差別はどうだったかを、最新の研究をもとに学習していきました。

歴史について学習すると、「差別なんて昔のこと。今の自分には関係ない！」となりがちなので、今回もお家の方にご協力いただき、それぞれが受けてきた「同和教育・同和問題学習」についての聞き取りをさせていただきます。ご協力いただいた方々、お忙しいところ、本当にありがとうございます。そのおかげもあって、「関係ない」とはならず、今も残る部落差別を、どう考え、どうしていけばいいかを考え合える時間になることができましたように思います。

今回もみなさんの感想をもとに、ふり返ってみたいと思います。どうぞ読んでください。

タブーにするのは、だれ？

■あまり口に出してはいけない話題であり“単語”である——「部落」は現代の人にとってそういうイメージなのではないかと思う。私は小学校6年生のときに、「山の粥」という教材を習った。そのとき担任に、県外からも人が来る大学などでは「同和問題」は絶対に言うな、と言われた。でも、部落差別は絶対に知っていないといけな知識であることを今日あらためて感じた。

私の母は、同和問題学習を小学校から大学までまったく受けていないと言った。小学校6年生ぐらいから受けた私にとってはショックだった。「無知は差別を生む」、受けていない人が悪いわけでもないし、学校にもいろいろと事情があったのかもしれない。そして同和問題だけでなく、他の差別にすべて共通していると思う。これが差別だと知らず、差別してしまった側は、「ふーん、知らなかった」で終わる。しかし、差別された側は、一生の傷になるかもしれない。差別をなくすためには、知ること。相手を知る。問題を知る。これからも「知る」「学ぶ」ことを続けていきたい。
(2組KM)

「口に出してはいけないこと」を、「タブー」と言います。タブーになればなるほど、どんどん問題は潜在化していき、解決が難しくなっていきます。では、タブー視しているのはいったい誰か。

以前、「P・M ペットボトル・マジック」という小説を出版したときのことで。実はこの小説を出版する前に、別の作品を出版社に渡していました。出版できるかどうかの審査をしてもらうためです。その小説のメインテーマが、部落差別でした。渡して一ヶ月くらい経ったころ、返事の手紙が届きました。長々と書かれた作品の講評の最後は、こう締めくくられていました。

「本作品の全国流通に関しては、被差別部落問題といった、

誤解を受けることも多い重いテーマを扱った作品であるだけに、結論として弊社からの出版は難しいという意見で一致するところとなりました」

頭からサーッと血の気が引いていくのと同時に、猛烈な勢いで血が逆流するような感覚になりました。「出版社やメディアがそんなだから、いつまで経ってもこの問題がオープンにならず解決していかないんだ！」猛烈に怒りました。

さらに一ヶ月後、またしてもその出版社から電話がありました。

「別に他の作品があればぜひ…」

〈何を今さら！ どの面さげて！〉

感情的になる自分を抑え、そっけなく返答をしたのですが、そのとき私は、岩手県の陸前高田駅があった場所に立っていました。東日本大震災が起きた翌年の夏、現地の状況を知っておきたくて、車で向かったのです。がれきの山、被害に遭った建物、仮設住宅、せわしなく行き来するトラックや重機。陸前高田から大船渡、釜石、大槌と、海岸線を一人で巡るのですが、何でも無いのに、ひとりで涙がこぼれるのです。何とも言いようのない気持ちに襲われ、自然に涙ぐんでしまうのです。そして思うのです。東電第一原発の放射能漏れ事故による、福島の子供に対するいわれなき差別を。「生まれで受ける差別は部落差別だけじゃない」そう思った私は、「やってやろうじゃないか」と、「ペットボトル・マジック」を書きはじめました。

そこに登場する、高校生の結夏とコウのやりとりの一節です。

「じゃあ、どうして言わないの？」

「言えればいいじゃん！」

オレは見えない何かをいらつくように放り投げる口調で言った。

「言えないから言わないのよ！」

乾いた空気が、ピシッと音を立てて裂けた。

「……………」

息を呑んだ。結夏の目を見つめた。心の中で。実際は、見る事ができなかった。

「……ごめん。……言うとな、差別されるから……差別されるのが怖いから、言えないんだよ」

「……うん」

結夏の真意も、差別の意味も分からないまま、それでも彼女を否定しなくて答えた自分の言葉を、恨んだ。

「差別されないって分かっていたら、みんな……思ってる本当のこと、言うよ……」(小説「ペットボトル・マジック」から)

このセリフのやりとりには、そんな私なりの隠れた意図があります。

タブーにしているのは、「私」です。他の誰かにその責任を押しつけるものではありません。そしてそれを突き破るのも、「私」です。タブー視している限り、物事は前に進みません。私たちはそのタブーに、チャレンジしているのだと思います。

負のループを断ち切る

■今回の学年全体人権学習を通して、差別は無知からできているものなのだと知りました。例えば、部落差別はケガレとかキヨメとか、何の根拠もない話から差別されはじめ、同じ人間なのに、それが現在にも部落差別という形で何も悪くない人たちが差別されるのはおかしいことだと思います。そして同和教育が始まりましたが、していない学校も多く、私の父もしていないそうです。母は毎週部落差別の学習をして、「同じ人間なんだから差別をしない」ということを学んだそうです。

最近ではさらに人権についての学習をするようになりました。なのにまだ、いじめがあるということは、人権の授業を他人事として捉え、真剣にしていなかったのかもかもしれません。授業をしていても話を聞いていなければ、それは無知と変わりません。するとまた差別…というようなループになるような気がします。その負のループを断ち切るためには、吉成先生がこれまでの学年全体人権学習で何度も言ってきた、「正しく知って、正しく行動する」ことと、それについて自分の考えを話す、つまり「自分を語る」ということなのだと思います。だから私たちはこれからも、人権について学び、自分を語っていきたいです。

(2組OA)

同和教育は、1969年に法律ができたことで、「国民的課題」として全国展開されたはずなのですが、そうはすぐにうまくいきませんでした。今のタブレットを使ったICT教育のようなもので、十分な準備がされて熱心に使う学校があれば、準備が不十分でうまく活用されない学校もあるようなものです。部落差別が他人事ではなく、身近な問題として熱心に取り組んだ地域があれば、自分事と思えず遠くのこのように思えて、なかなか取り組みが進まない地域もあったのです。つまり、「どこで学んだか」によって、「知ってる・知らない」となっていたのが現実です。全国に部落差別があったのに。

私も学んだ記憶はありません。学んでいたはずなのですが、教えるまでの準備が、当時の学校や教員にできていなかったのだと思います。でも結果として、「知らない」私は大人になってしまいました。たまたま教員という仕事に就いて、部落問題について正しく学べたので今の私があるのですが、他の同級生たちはどうでしょうか。どこかで同じように学ぶ機会があったならいいのですが、そうでなければ、もしかするとどこから間違った部落差別意識を植えつけられ、正されることのないまま、今も生きていられるかもしれません。ましてや、同和教育なんてなかった時代に生きた人たちは、正される機会を得られないまま、今も生きています。それを、個人の責任にするには無理があります。いくら「国民的課題」と国が言っても、そのことが国民にちゃんと届いていなければ、それは、「絵に描いた餅」となるのです。

差別や人権侵害は、放置されればされるほど、どんどん悪化していきます。放っておいてなくなることはありません。放っておけばより大きな問題となって社会問題化し、国は放置した責任を追及されることになります。いじめもそうですが、差別や人権侵害は、その事実が認められれば、即刻対応する。それが鉄則で

す。それを長年にわたり放置してきた責任が、国にはあります。公務員である教員にも、差別をなくしていく責任があるのです。人権学習をしていく責務があるのです。

「学び続ける」ことを学ぶ

■僕は今回の全体人権学習で差別問題について知り、いろいろなことを学びました。自分もあわせて、ほとんどの人が部落差別は昔のことだと思っていました。でもそれは今も変わっていないということに気づきました。

他にも、「差別は命や物を粗末に扱うこと」という考え方があるということも知りました。僕は今、いろいろな新しい知識を持っていますが、それを忘れず、ずっと自分の考えとして持っていることが大切だと思いました。でもその考えは人によって違います。その考え方が間違っている人がいるから、人権問題があるのだと思います。もっと言ったら、人によって答えもたくさんあるということなので、その答えを出すために、自分が今回の学習で一番心に残った「学び続けることを学ぶ」。その大切さを忘れずに、学び続けようと思いました。

(4組MR)

人権学習に本気で取り組むようになると、成績が上がります。それが、私がこれまでやってきた実感です。みんながみんな、100点を取れるようになるわけではありませんが、それぞれが持っている能力の最大限の結果が得られるようになるということです。

なぜか。

自分に謙虚になるから。自分に正直になるから。努力することの大切さを学ぶから。正しさを学ぶことの大切さに気づくから。それを行動に移すことの大切さに気づくから。正しさを実行する心地よさを知るから。今の自分はどうか——。

成績を上げるために人権学習をするわけではありませんが、人権学習を進めていけば、結果としてそうなるということです。人によって答えはそれぞれでいいと言いました。でも、だからといって、何をしてもいいというわけではありません。人の命と幸せを奪うことまで許されているわけではありません。もちろん、自分の命と幸せもです。それだけは守ったうえであれば、どんな答えがあってもいいのだと思います。

RADWIMPSというグループに、「正解」という曲があります。その一節。

「ああ 答えがある問いばかりを

／教わってきたよ そのせいだろうか

／僕たちが知りたかったのは

／いつも正解など大人も知らない

／喜びが溢れて止まらない夜の眠り方

／悔しさで滲んだ心の傷の治し方

／傷ついた友の励まし方……」

人権学習だなー、と思います。みなさんがしているような人権学習を3年間続けた生徒が、その経験をふりかえり、次のように言ってきました。

「答えのない問いのようなものに、

みんなが向き合っているような感覚でした」

今回の全体学習も、そんな時間だったように感じます。そんな時間をみんなで積み上げていくことが、中学生であるみなさんにとって、すごく貴重で、大切な時間ではないかと思っています。(15号に続く)